「宗教と社会」学会第９回学術大会

プログラム

2001（平成 13）年　6 月 16 日（土）～17 日（日）
慶應義塾大学・三田キャンパス

「宗教と社会」学会　第９回学術大会本部
〒108-8345　東京都港区三田 2-15-45
慶應義塾大学（三田キャンパス）　樫尾直樹研究室
FAX：03-5427-1578
e-mail: kashio@flet.keio.ac.jp

会　場　案　内　図

慶應義塾大学　三田キャンパス

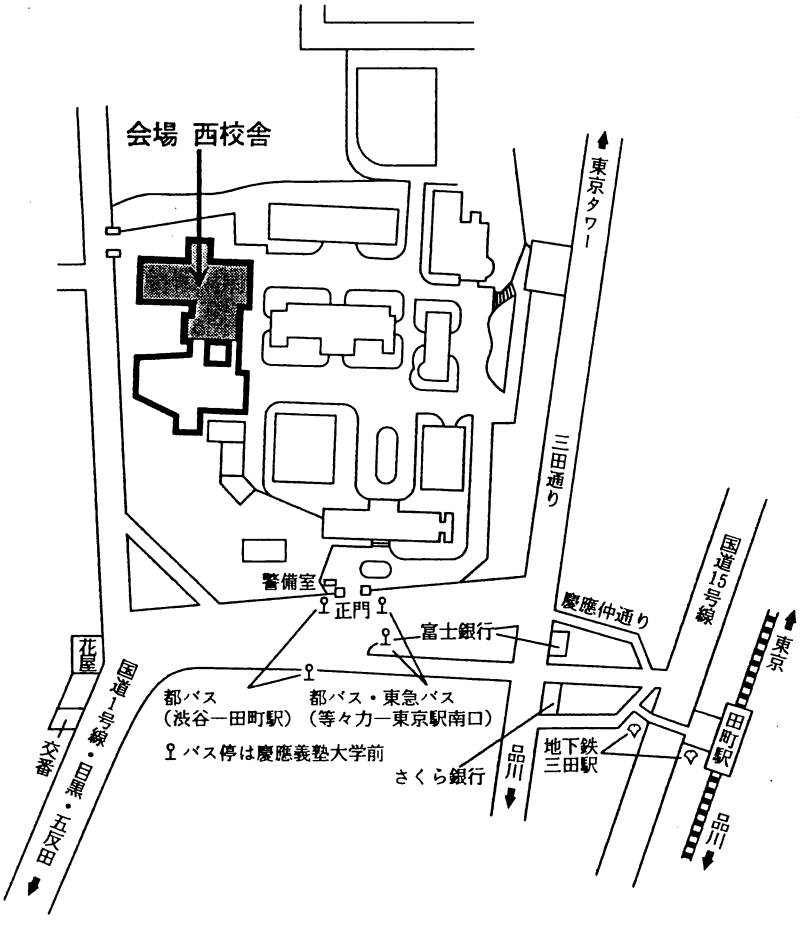
東京都港区三田 2-15-45

☎ 03-3453-4511（代表）

ＪＲ京浜東北線
〃 山　手　線　田町駅下車（徒歩約８分）

都営地下鉄浅草線
〃　　三田線　三田駅下車（徒歩約７分）

東京ー田町　約10分／上　野ー田町　約20分
新宿ー田町　約25分／水道橋ー三田　約15分



「宗教と社会」学会第９回学術大会

日時

2001年6月16日(土)・17日(日)

会場

慶應義塾大学(三田キャンパス)
〒108-8345　東京都港区三田2-15-45

参加費等

大会参加費	3000円（学生2000円）
懇親会費	5000円（学生3000円）
昼食弁当代	1000円(6月17日の昼食のみです)

振替をもって参加申し込みとします(振替用紙はパンフレットに同封)。
振替番号：00190-6-663540「宗教と社会」学会第９回学術大会事務局
(同封の「振替に関するお願い」を参照して下さい)

「宗教と社会」学会　第９回学術大会本部
〒108-8345　東京都港区三田2-15-45
慶應義塾大学(三田キャンパス)　樫尾直樹研究室
FAX：03-5427-1578
e-mail: kashio@flet.keio.ac.jp

使用教室一覧

★両日共通★

＊ 受付　　西校舎一階ロビー

◇ 当日は、まず受付においで下さい。

◇ 使用教室は全て**西校舎**です(懇親会除く)。

★１日目★（6 月 16 日　土曜日）

＊ 学会・大会合同本部	514
＊ 休憩所・クローク	515
＊ 個人発表 A 会場	512
＊ 個人発表 B 会場	513
＊ 総会	517
＊ 常任委員会	523A
＊ 懇親会	北館 1 階カフェテリア

★２日目★（6 月 17 日　日曜日）

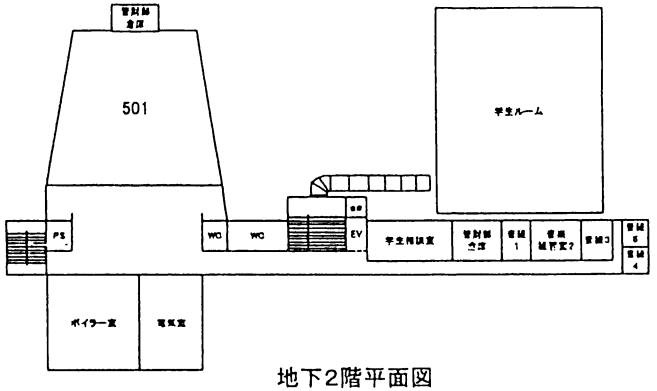
＊ 学会・大会合同本部	514
＊ 休憩所・クローク	515
＊ ワークショップ 1	512
＊ ワークショップ 2	513
＊ ワークショップ 3	516
＊ 昼食	515
＊ 常任委員会	523A
＊ 編集委員会	523B

※当日連絡先　大会委員長直通携帯電話

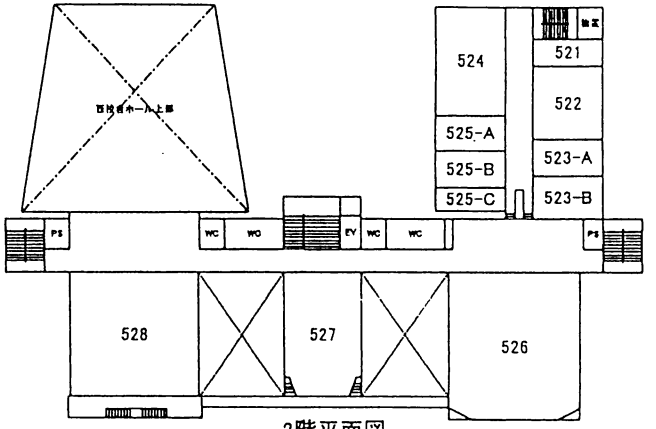
TEL：090-1616-4120

西校舎教室平面図

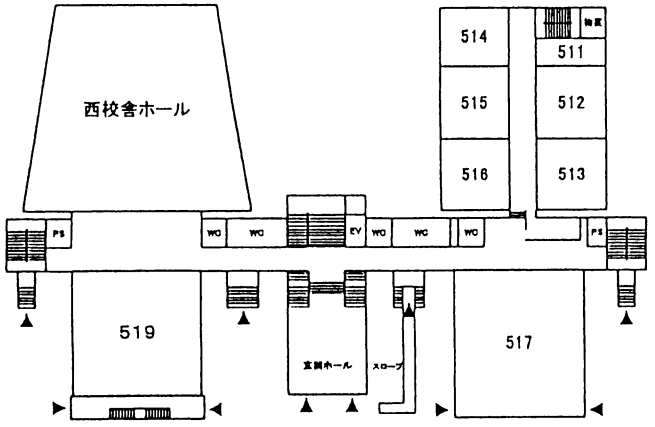
2001/2/16 編集



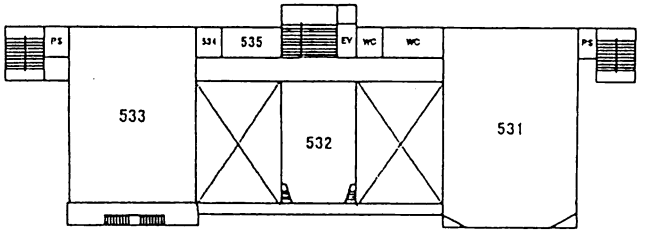
地下2階平面図



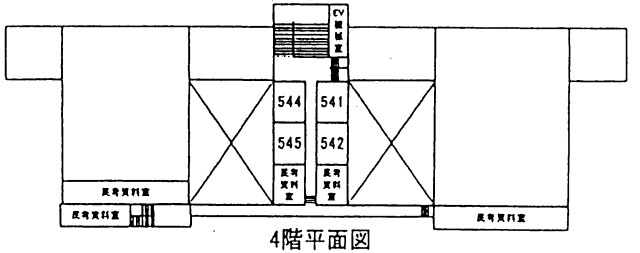
2階平面図



1階平面図



3階平面図



4階平面図

NO SCALE

タイムテーブル

6月16日(土)

11:00 より	受付（西校舎一階ロビー）	11:00 ↓ 12:50	常任委員会（二階小会議室）
	個人発表Ａ会場(512)	個人発表Ｂ会場(513)	
13:00 ↓ 13:50	浦崎雅代（東京工業大学大学院） 「死と向き合う場における現代宗教の役割－タイにおけるターミナルケアに携わる開発僧と在家信者の関係から－」	糸静子（九州保健福祉大学） 「痛みの原因と癒しについての宗教的・哲学的観点からの一考察－聞き取り調査を中心に－」	
14:00 ↓ 14:50	中島岳志（京都大学大学院） 「現代インドにおけるヒンドゥー・ナショナリズム運動－RSS（民族奉仕団）の理念と活動をめぐって－」	松谷満（大阪大学大学院） 「キリスト教信者の宗教性と社会意識－教派間比較を中心に－」	
15:00 ↓ 15:50	佐藤木綿子（京都大学大学院） 「伝統文化とジェンダー規範の表象と実践－沖縄県久高島の祭祀とオナリ神信仰を事例に－」	林貴啓（京都大学大学院） 「宗教リテラシーのために－宗教教育への一展望－」	
16:00 ↓ 16:50	中西尋子（龍谷大学） 「クリスチャンホームとなる過程－在日大韓基督教会における家族の事例－」	猪瀬優理（北海道大学大学院） 「脱会の条件―脱会カウンセリングと自発的脱会―」	
17:00 ↓ 17:50	総会（517）		
18:00 ↓ 20:00	懇親会（北館１階カフェテリア）		

6月17日(日)

9:30 より	受付（西校舎一階ロビー）		
	ワークショップ（前半）		
10:00 ↓ 12:00	1「宗教が創り出す新しい絆」(512)	2「日本社会とキリスト教」(513)	3「新・宗教研究の課題と展望」(516)
12:00 ↓ 13:30	昼食(515)※	常任委員会（523A）	編集委員会(523B)
	ワークショップ（後半）		
13:30 ↓ 16:30	1 (512)	2 (513)	3 (516)

※弁当(振替にて申込)は、515にて、昼食券と引き換えでお渡し致します。昼食券は、受付時にお渡しします。

■ 「宗教と社会」学会第9回学術大会 発表要旨集 ■

個人発表　2001年6月16日(土)　13:00-16:50
ワークショップ　2001年6月17日(日)　10:00-12:00
13:30-16:30

個人発表

[A1] 「死と向き合う場における現代宗教の役割ータイにおけるターミナルケアに携わる開発僧と在家者の関係からー」

浦崎雅代(東京工業大学大学院)

死は、誰もが避けられない事実であり、死そのものは問題ではない。だが死をめぐる社会的問題は常に存在する。現代日本においては、死を身近で感じられなくなった若者が起こす凶悪な犯罪、リストラ死とも呼ばれる中高年の自殺増加、高齢者の介護と死への向き合い方などがあろう。

死をとりまく問題の背景には、人生観や宗教観などが存在し、いわば死は宗教と社会との接点である。死を迎えた時、すなわち葬式の場のみならず、現代では、死と向き合う場面、すなわち死の準備段階において、去り行く者や残される者に対する癒しの側面から、宗教あるいは宗教者の役割が期待される。しかし、それは時代や地域によって微妙に変化するものでもある。

当発表では、西洋や日本におけるホスピスケアに携わる先行研究の分析とともに、アジアの視点、ここではタイにおける、ターミナルケアに携わる開発僧と患者や家族を含む在家者との関わりを事例として、死と向き合う場における宗教の役割を明らかにしたい。

日本においては、ホスピスの重要性が高まっており、キリスト教系ホスピスに加え、仏教系の団体もターミナルケアに取り組みはじめている。そこで、仏教的なケアとか何かを考える上で、タイ僧侶と関係を持って仏教的ケアを模索する動きもある。

ここではそうした事例をもとに、仏教的なケアとは何かを考える上で考察の一助となるであろう、日本とタイとの仏教的素地の違いからくる死生観や死を受容していく様の違いをあきらかにする。その上で、日本とタイの死と向き合う場における問題点、課題点の現状分析を行なう。

これまでは、タイにおける開発僧の活動としてエイズホスピスがあげられるケースが多く、その活動については報告されているが、彼らの活動が仏教的ケアとしてどの程度有効であるかについての具体的な研究はほとんどなされていない。

ゆえに、この研究の意義は二つある。一つは、死をめぐる比較宗教社会研究として、もう一つはタイの開発僧研究としての位置付けである。

この二つの研究視点から、現代社会における宗教の役割を、死をめぐる三者(僧侶、去り行く者、残さ

れる者)の立場から検証する。そして仏教的ケア僧侶、在家者それぞれの役割をあきらかにすることによって、宗教者の社会活動の限界および可能性を示していきたい。

[A2] 「現代インドにおけるヒンドゥー・ナショナリズム運動ーRSS(民族奉仕団)の理念と活動をめぐってー」

中島岳志(京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科博士課程　南アジア地域研究)

1980 年代以降のインドにおいて、ヒンドゥー・ナショナリズム運動の拡大化が急激に進行している。特に、この運動を牽引するRSS(Rashtriya Swayansevak Sangh; 民族奉仕団)の活動への参加者の急増は目を見張るものがある。また、このRSSが最大の支持母体となっているBJP(インド人民党)は、1990年代に入って中央議会での議席数を急激に増やし、ついに 1998 年の総選挙において念願の政権奪取に成功した。そして、首相の座にはRSSと密接な繋がりをもつA・B・バージパイーが就き、さらに、いくつかの国務大臣のポストにはRSS 関係者が就任した。

このようなヒンドゥー・ナショナリズムの潮流は、「ヒンドゥットゥワ」(「ヒンドゥーの本質」の意)をナショナルな価値として提示し、それに自己同一化しない非ヒンドゥー(特にムスリムとクリスチャン)との対立を深めていることから、インド国内外で強く批判されている。しかし、その批判とは裏腹に、イギリスによる植民地支配と近代的セキュラリズムの導入によって分断された宗教的倫理規範の包括性を回復すべきであるという彼らの主張は、都市の中間層を中心に広く浸透し続けている。

本発表では、このヒンドゥー・ナショナリズムを分析するためにRSSの理念と活動に注目をする。特にこれまでの研究において捨象されてきた一般民衆レベルのヒンドゥー・ナショナリズムの活動を分析するために、RSS が活動の中心と位置付ける「シャーカー」(Shakha)という草の根レベルの活動に議論の焦点を据える。シャーカー活動とは、整列・行進に始まり、ヨーガや武術、伝統スポーツの訓練、マントラや賛歌の斉唱、訓話や問答、対話などを行うもので、インド各地で毎日開かれる RSS の末端の活動である。このシャーカーの場において表象されるさまざまな言動の分析を通じて、RSSが志向する「規律化された国民的身体」がいかに形成され、ムスリムやクリスチャンの他者化がいかに図られているのかを明らかにする。

さらに、この議論を通じて、近年の全世界的な潮流である宗教的価値の追求とナショナリティーの形成が連動した運動を考究する視座を提示したい。

[A3] 「伝統文化とジェンダー規範の表象と実践ー沖縄県久高島の祭祀とオナリ神信仰を事例にー」

佐藤木綿子(京都大学大学院人間環境学研究科)

本発表の目的は、沖縄県久高島での参与観察と女性への聞き取りをもとに、「文化」や「ジェンダー」

の定式化された表象と島人たちによる実践との相違を、久高島の祭祀とオナリ神信仰の事例を用いて明らかにする事である。

「沖縄女性」の表象としてよく語られるものとして「オナリ神信仰」に顕著な「女性の霊的優位性」があげられる。女性がその霊威によって男性を守護・祝福するという「オナリ神信仰」こそが「沖縄文化」の基盤をなすものとして扱われてきた。従来の沖縄研究においては「男性／女性」、「沖縄／本土」という二項対立的図式が自明視されてきたのである。こうした議論の問題は、「文化」を均質的で閉じたものとして、また「ジェンダー役割」を固定的なものとして本質主義的に設定してしまうことにあった。

これに対して、本発表では、二項対立的図式を「解体」し、「久高文化」とは常に流動的につくりあげられているものとして捉え、「久高女性」というカテゴリーの内部における多様性に着目する。しかし、現在の久高島においても「文化」や「性」の二項対立的表象が現地の人からも語られることをふまえ、そのような語りにそぐわない事例を紹介する。

まず、「自己（久高）／他者（外部）」規範が固定的なものとして語られる「伝統的祭祀」に着目する。祭祀の「真正性」が問題とされ、「久高／他者」間のカテゴリーが固定化される語りがなされる一方で、イザイホー加入資格の変化など、帰属ルールの変化が指摘できる事例を紹介する。

次に、「女性＝霊力によって男性を守るもの／男性＝守られるもの」という静的な二元論的図式を一度「解体」し、「女性」のカテゴリーを「神人」、「潜在的神人」、「タマガエー（イザイホー経験者）」、「イザイホー未経験者」にわけて「霊力」や「祭祀」に関する様々な語りを紹介する。また、「祈り」という宗教実践が「誰が祈るか」というカテゴリーに優先されるようになった家庭祭祀の事例を取り上げ、ジェンダー規範の変化を指摘する。

過疎化、高齢化がすすむ現在の久高島において、「女性の霊威」や「伝統文化」が消滅するという語り口ではなく、島民たちの実践によって柔軟に現実に応じ変わりうるものであるということを論証したい。

[A4] 「クリスチャンホームとなる過程－在日大韓基督教会における家族の事例－」

中西尋子（龍谷大学非常勤講師）

本報告では、在日大韓基督教会の初期、移民の第1世代の信者がクリスチャンホームを形成していく過程を問題とする。在日大韓基督教会を取り上げる理由は、私の関心が在日大韓基督教会の定着と展開にあるというのがまず第1である。第2に信者にクリスチャンホームになったきっかけを聞くと、何人もが「母（あるいは祖母）がクリスチャンだったから」と答えた点にある。最初の信者が夫でなく妻であるということに興味を覚えた。夫がクリスチャンで妻が非クリスチャンであれば、妻が夫の信仰にあわせることは考えられる。しかし、その逆の場合、夫をも導き、どのようにクリスチャンホームを形成し得たのだろうか。このような疑問を在日韓国人の家族の生活史を通して明らかにしたい。このような入信や信仰の継承の問題はひとつの宗教社会学のテーマとしてあるが、ひとつの家族の内部から入信や信仰の継承を問題にしているものはあまりないように思われる。

分析にはクリスチャンの一家族の生活史の聞き取りを用いる。移民の第1世代を問題とするが、ここで取り上げる家族の第1世代は他界しているので、データは子どもである第2世代の語りである。解釈などを補足する場合は他の家族のデータも用いる。そして、夫および妻それぞれの家族や同胞との関係の形成からクリスチャンホームとなる過程をたどりたい。

事例として取り上げるのは、移民の第2世代(Tさん)の定位家族である。Tの母であるRは 1906 年生まれ。Rがクリスチャンになったのは、結婚する前の娘時代のことである。村に外国人の宣教師が来て、そこに通って字を習いながらキリスト教に触れた。Rは男兄弟ばかりの末娘だった。家族は誰もクリスチャンではなかったが、R1人が教会に通うことに対して誰も反対しなかった。かぞえの 18 歳ぐらいで親が決めた相手Zと結婚。Rがクリスチャンであることは特に問題にならなかったようである。Rがクリスチャンであることが問題とならなかったのは、Zが次男であり、祖先祭祀をする義務がなかったことにもよるだろう。結婚後、夫は来日し、京都の染め物工場(日本人経営)で働く。Rは先に来ていた夫を追って来日。京都南部の在日韓国・朝鮮人集住地区に暮らし、3男1女をもうける。Rは来日後は地域にあった在日朝鮮人教会に通う。Yにとって来日後の生活は、子どもを育て、家計を助け、教会に通うという生活であった。それに対してZは仕事一筋。早朝に出勤し、帰宅は遅かった。子どものことは妻に任せっきりであったようである。妻や子どもが教会に通うことに対して、Zは全く反対をしなかった。食事の時は、Rや子どもたちは食前の祈りを行った。Zは遅く帰宅して一人で食事をとることが多かったが、家族揃って食事をするときでもRは食前の祈りを欠かさなかった。末娘は助産婦でもある伝道師に取り上げてもらっている。子どもたちは洗礼を受け、成長してからも教会に通う。長男と三男は他学部を経た後、神学部に入った。Zが教会に通い始めたのは、仕事中に大火傷を負って入院した時、妻の通う教会の信者が頻繁に見舞いに訪れたこと、親とずっと同居するはずの長男が伝道のために家を出たことがきっかけとなっている。Zはその後、教会に通うようになり、やがては夫婦そろって執事となった。子どもたちは、長男と三男が牧師、次男は長老、長女は執事となっており、父母の追悼礼拝は毎年、家族・親族が一堂に集まって行われる。

Rの定位家族がクリスチャンホームとなることを可能にしたのは以下のような点が指摘できると思われる。(1)夫のキリスト教に対する寛容さ、(2)夫に祭祀継承の義務がなかったこと、(3)夫の親族が日本にいなかったこと、(4)夫が定職に就き、仕事一筋であったこと、(5)妻にとって教会が生涯を通しての所属集団であったこと、(6)子どもを教会に通わせ、クリスチャンとしてのしつけができたこと、(7)教会が同胞の互助組織となっていたこと、などである。

(1)は、Rの夫だけに限ったことではないかもしれない。Rの親兄弟もRがクリスチャンとなることに反対しなかったし、Zとの結婚にも問題とならなかった。(4)や(7)によっても、夫は妻や子どもに対して寛容でいることができ、同時に妻は(6)のように、教会通いや子どものしつけなどの面においても信仰を守ることができた。Rにとっては(2)(3)のためにキリスト教信仰を継続することを容易にしたと考えられる。

在日韓国・朝鮮人の人々にとって、家族・親族は重要な準拠集団である。かつては現在よりも一層重要であったと思われる。家族以外に親族は日本になく、夫のZにとって所属する集団は、退職して職場を離れると家族だけとなる。その時、妻や子どもはみなクリスチャンであった。それに対して、妻のRにとって教会は、(5)にあげたように生涯所属し続ける集団であった。来日してから、継続して教会に通い、そ

こでの人間関係は生涯続く。この事例でのクリスチャンホーム形成の過程は、非クリスチャンである夫とクリスチャンであった妻がそれぞれにどのような家族・同胞の人間関係や生活基盤を形成してきたかによっている。

本報告では、1家族だけの事例研究であるから、在日大韓基督教会の発展と展開を考える場合、夫が非クリスチャンのままの事例や、親が用意したキリスト教信仰の基盤から、どのように自分自身の信仰を形成していったかも考えていきたい。

[B1] 「痛みの原因と癒しについての宗教的・哲学的観点からの一考察 ー聞き取り調査を中心にー」

糸静子(九州保健福祉大学)

1. 調査研究の目的

医学の進歩により、難病が治ったり、けがや事故による重症患者が完治するまでになった。しかし、現代の医療で実際に治るのは、全体の約 20%であり、残り約 80%の病気の殆どは、原因が不明で、形而下一辺倒の現代医学では解明不可能といわれている。また、ここ数年来、医療費の負担増や薬害の問題もあり、西洋医学以外の代替医療を取り入れるようになってきた。身体の局部だけを診て治療するのではなく、人体をトータルに捉えて治療を施すやりかた、つまり東洋医学が見直されてきた。

人間が本来備えている自然治癒力を高める癒しの方法、心の治療や食事療法が盛んになってきた。自然治癒力を高めるのに顕著な効果が認められる例として、患者自身が「自然界から食べ物を戴き自分が生かされていることへの感謝の気持ち」や「幸福感」を持つことである。そのことによって、体内の免疫が活性化する。

また、人間は「肉体」と「心」と「気」から成り立ち、気の導引をスムーズにすることで治癒力が高まることもわかってきた。「気」は「霊気」とも「生命の根源」とも言われている。「感謝の気持ちを持つ」「気の流れをスムーズにする」等が実際に病気の癒しに関連していることから、「痛みの原因」と「宗教・哲学」にどのような因果関係があるのか、それを探りたい、また、形而上学を学びこれからの医療に活かしていくことの重要性を感じ、調査研究に関わった。

2. 方法

・期日と場所　平成 12 年 7 月 01 日～7 月 02 日　新生仏教福岡道場
平成 12 年 7 月 15 日～7 月 16 日　西都道場
平成 12 年 8 月 18 日～8 月 22 日　本部と徳山支部
平成 12 年 8 月 26 日～8 月 27 日　西都道場
平成 12 年 9 月 09 日～9 月 10 日　宮崎支部
全 12 日間　宗教法人新生仏教教団本部所在地　山口市吉敷129―22

・対象と方法　信者家族15ケースが対象　方法として筆者が教義の内容を理解するために道場で

勉強をし説明を聞く。体験した信者や家族に面接や電話で質問し詳細に経過を聞く

3. 聞き取り調査をした事例

・両膝の痛みがとれ車椅子が不要となる(73 歳女)・姉妹の潰瘍性大腸炎と心身症(28 歳と 25 歳女)・上腸間膜動脈症候群(26 歳男)・脳動脈破裂と水頭症2カ月後意識回復(45歳男)・交通事故による意識不明の重症が快方に向かった(7歳女)・重度の耳鳴りが軽くなった(64歳男)・乳ガンの症状がなくなった(31歳女)・直腸ガンと心臓病が治った(医師自身の体験男) 他7事例

4. 結果と考察

新生佛教の教義の中心として、人間が生かされている意味は「世の役に立つ」こととされている。また、自然界には、一定の法則があり、その法則によって森羅万象全てが運行し管理されている。人間も自然の一部であり、密接な関係がある。したがって、その自然の法則を知り法則(道理)に適った生き方を心がけねばならない。と教えられている。

患者やその家族は、自然の法則を学び実践することによって病気の原因が除去され、科学や医学等の物理的限界を超えた状態で快方に向かい、心身が癒されてきている。病気の形而上的な原因は道理に適った生き方ができてないところにあるとされる。神仏の教えを信じ実践していると、そのご意趣を悟ることができる。

教団の教主は、ご遷主様と称されているが、本質的には当来佛であり、人間の身体をかりて神仏がこの世に出現された存在だと言われ、形而下的には考えられないような法力を示される。ごく自然にいつの間にか心身が癒され快方に向かった(如意)事例を報告する。(参考文献 『気とは何か』NHKブック 『癒しの原理』人文書院 石井誠士著『新生仏教教団史上・下』『新生仏教教導編』新生仏教出版局)

[B2] 「キリスト教信者の宗教性と社会意識－教派間比較を中心に－」

松谷満(大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程)

目的

現代日本のキリスト教信者はキリスト教をどのように受容しているのだろうか。本発表は日本のキリスト教信者を対象とした計量的研究の結果報告である。本研究では、信者個々人の属性・宗教性・社会意識という 3 側面に焦点を当てている。今回の発表では特に、プロテスタント・カトリックの教派間比較にしぼって報告する。また、それらをアメリカのキリスト教信者とも比較することによって、より明瞭に日本におけるキリスト教信者の特徴を描き出している。

意義

本発表の意義は大きく分けて以下の 2 点にある。

1. 海外、特にアメリカを中心に宗教性をめぐる計量的研究は盛んにおこなわれている。その成果

をとりいれた本格的な計量研究である。

2. 国際比較という視点の重視。日米の社会的背景もふまえた宗教性と社会意識についての比較社会学的試論としての意味も持つ。

方法

実際に阪神地域のキリスト教信者に独自調査「キリスト教徒の宗教性と社会意識に関する調査」を行なった。プロテスタント(改革・長老派／組合派／メソジスト／ペンテコステ派)およびカトリックの 9 つの教会に対し、計 910 票のアンケート用紙を配布し、回収数は 493 票、回収率は 54.2%であった。そのデータについて、計量的な分析を行なうとともに、General Social Surveys などの 2 次データも用いて、アメリカのキリスト教信者との比較を行なった。なお、調査票の質問項目は大きく 4 つに分かれている。主に General Social Surveys と同一のものを、宗教と社会意識に関連する項目について取り上げた。

1. 基本的属性:年齢、性別、学歴、婚姻、職業、収入
2. 宗教的属性:教派、入信時期、入信年齢、家の宗教など
3. 宗教意識と宗教行動:礼拝出席、祈りの頻度、聖書を読む頻度など
4. 社会意識:道徳意識、中絶・死刑制度・安楽死についての意見、政治意識など

分析

本発表では、独自調査データをもとにプロテスタント信者とカトリック信者について両者の類似点・相違点を分析し、その傾向を考察している。また、それがアメリカにおける教派間の差異と、どのように対応しているのかを詳細に比較・検討している。

その内容としては、大きく分けて①年齢・性別・学歴などの属性的な側面(日本ではどのような階層の人々がキリスト教を信仰しているのか)、②宗教性の側面(日本のキリスト教信者は、アメリカの信者と共通した信仰を持つのか等)、③中絶・死刑制度についての意見、性別役割意識などの社会意識の側面(日本のキリスト教信者の宗教意識は日常的な社会意識にどのように反映しているのか、それはアメリカの信者とは異なるのか等)の 3 点について多変量解析を試みている。

結果については、当日の発表において報告する。

[B3] 「宗教リテラシーのために－宗教教育への一展望－」

林貴啓(京都大学大学院人間・環境学研究科博士課程)

いま日本の宗教教育に求められるものは、「宗教」を広義に理解することを通じて、宗教への「関心」を呼び起こすことにあるのではないか。

多くの日本人にとって、「宗教」といえば基本的に制度宗教、創唱宗教のことである。そのうえで「宗教」を敬遠する態度をとるのが典型的だといえよう。とくに若者のあいだでは、「宗教」といえばむしろ新宗教、場合によってはカルトが連想される向きさえ強い。

だが宗教を制度的なものにとどめず、むしろ広義に、広範に理解する見地も、宗教学においては有力である。たとえば実体的な「宗教」とは区別して理想へ向かう態度としての機能的な「宗教的なもの」を示したデューイの立場や、宗教の根本を「究極的な関わり」にみたティリッヒなどの立場は、その代表的なものといえる。「制度・組織への関与」に限られない「経験」「生き方」「関心」のレベルで、こうした広義の宗教概念は考えられているといってよいであろう。

このように宗教を広義に理解するかぎり、組織宗教にコミットしない人々にとっても「宗教」は他人事ならざるものとなり、どんな態度をとるにしても、各人にとって「自分自身の問題」という性格を帯びてくる。宗教教育において、こうした広義の宗教概念を普及、定着させることで、若い世代にも、宗教を自分自身の問題として受け止め、考えるという態度、関心を呼び起こすことも期待できるのではないだろうか。関心を呼び起こすことに努めつつも、宗教に対してどんな態度をとるかはあくまで各人の判断に委ねる立場にとどめるならば、直接「宗教的情操の涵養」を目指す立場に比べて、異論の余地は少ないものと思われる。

他宗教、特に異文化の宗教への理解を深めることをめざす「寛容教育」や、危険なカルト宗教への予防措置としての「安全教育」などといった宗教教育の諸次元も、宗教はあくまで自分自身の問題でもあるという姿勢が確立できていれば、より効果的なものになるに違いない。

宗教は「自分の問題」でもあるという積極的な関心を踏まえて、さまざまな次元にわたる宗教への知識・理解を持つこと、そして自らの態度において主体的な判断を下せること—こうしたことを「メディア・リテラシー」などにならって「宗教リテラシー」と名づけるならば、この「宗教リテラシー」の確立が、宗教教育の目標として求められる、といえないだろうか。

[B4]　「脱会の条件－脱会カウンセリングと自発的脱会－」

猪瀬優理（北海道大学大学院文学研究科　社会システム科学講座　博士課程）

人がなぜ入信するのか、という問題は宗教に着目する社会科学研究のなかで長らく議論されてきた。その一方で、脱会に関する注目は少なかった。しかし、入信プロセスに関する研究が進む中で、入信という行為は一度入信するとその考えが永久に変わらない不可逆的なものではなく、脱会の道へ進む可能性のあるものとしての認識も出てきた。本発表では、「入信」を宗教集団のパースペクティブと出会い、受容するまでの直線的な過程として捉えるのではなく、パースペクティブの受容と拒絶の間で揺れ動く過程として捉える。この揺れ幅が受容の方に振れれば教団成員としてのメンバーシップは継続し、拒絶の方に振れれば教団からの離脱が促されることになるだろう。宗教集団のパースペクティブに触れた行為者はそれを受容するか否かの選択を迫られる。どのような条件で受容あるいは拒絶することを選択するのであろうか。脱会の研究はまず、ディプログラミングあるいは保護説得による脱会カウンセリングの問題として取り上げられたが、次第に自発的に脱会する人々へと関心が移ってきた。このような先行研究では、脱会カウンセリングによる脱会と自発的脱会による脱会との差異が示されている。たとえばWright[1984]は、脱会カウンセリング経験者が教団内での経験を否定的に述べるのに対して、自発的な

脱会者は教団での経験は無駄ではなかったと語る傾向があることを指摘している。しかし、同じ脱会という行為である以上そのプロセスや条件に関しては何らかの共通項があるはずである。本発表では、入信・脱会という行為を教団内外の情報との親和性の程度、および教団内外との人間関係の強弱といった点に着目する。これをガイドラインとして、脱会カウンセリング経験者と自発的脱会者との間の異同、および脱会の条件についてのモデルを提示してみたい。対象とする教団は、ものみの塔聖書冊子教会である。この時、注目されるのは、自分で入信を自律的に決定したわけではなく、親の信仰を受け継ぐことを要請された二世信者である。脱会した二世信者の多くは自発的脱会者であるが、彼らは自発的に入信を選択したわけではないため、Wright[1984]が指摘したような積極的な意味付けを過去の信仰に与えられる前提条件に乏しい。また、近年のインターネットの普及により、インターネット上で流れる協会に関する情報が自発的脱会者に与える影響力が高まってきている。特に二世信者に顕著である。

調査によって、協会から離れた時期と外部情報(インターネット、書物他)に触れた時期とのズレがあるかないかで、その情報の使われかたや彼らの抱えている問題に大きな違いが出てきていることがわかった。ある自発的脱会者は、そのプロセスを追ってみれば脱会カウンセリングと同様の展開を見せていると考えられるし、別の自発的脱会者はそれとは全く異なる脱会のプロセスを歩んでいることを指摘できるのである。インターネットや外部者の書物など教団外部の情報の存在と、掲示板やメーリングリストを通じて択られる教団外(元信者)とのコミュニケーションの存在に着目することの意義はここにある。本発表では、脱会のために有益な情報にどの段階で触れたかによって、脱会のプロセスや脱会に必要となる条件が異なることを指摘したい。

附記:

本発表の前提となる発表としては、昨年11月に行われた日本社会学会での発表(「脱会プロセスにおける外部情報の効果ーインターネット情報の利用」)、および、2001 年 3 月に行われた「インターネットと宗教」プロジェクトが開催した研究会での発表(「情報の形態による利用と効果の違いー脱会に与える影響」)がある。本発表は、これらの発表を発展させたものである。日本社会学会発表で作成した「脱会プロセスモデル」は、脱会の条件や段階の設定が混乱した不十分なものであり、修正が必要であったが、3 月の発表ではこの部分を発展させることはできなかった。また 3 月の発表の内容は、掲示板やメーリングリスト、テキスト情報の提供という情報形態の違い(あるいは提供しているコミュニケーションの程度)によって、脱会にむけてどのように異なった効果をもたらしているのかを不十分ながら示したものであり、本発表で意図している課題とは異なる論点での発表であった。本発表では、特に脱会条件の抽出に論点を絞って議論したいと考えている。

ワークショップ

1.「宗教が創り出す新しい絆」

発表者:各人20分＋質疑応答10分

辰巳頼子(上智大学大学院、フィリッピン:イスラーム)

塩月亮子(日本橋学館大学、沖縄:ユタ)

渡辺雅子(明治学院大学、日本・ブラジル:新宗教)

土佐桂子(神戸大学、ミャンマー:ウェイザー)

三尾裕子(東京外国語大学、台湾:道教)

足羽興志子(一橋大学、スリランカ・中国:仏教)

コメンテーター:各人10分

石井研士(國學院大學)、島村恭則(国立歴史民俗博物館)、

中牧弘允(国立民族学博物館)、山中弘(筑波大学)

総合司会

鈴木正崇(慶應義塾大学)、吉原和男(慶應義塾大学)

趣旨:

現代社会の大きな変化に伴い、人々の動きが極めて流動化し、それに伴って人間同士を結びつける社会的な絆の在り方も大きく変貌しつつある。移民、難民、ディアスポラ、IT 革命など、こうした社会の動きに連動して宗教はいかなる働きや役割を果たすのか、或いは宗教を利用したり読み変えたりしながら人々はどのような結びつきを再構築しようとしているのか、いわゆる伝統宗教の意味世界は社会関係とどのように切り結ぶのか等、21世紀における「宗教と社会」の相互関係を問うのが、本ワークショップである。特に、アジア地域の比較を焦点としている。

幾つかの問題提起を行うと以下のようになろう。

1. 絆の多様化

人々を結びつける絆を挙げると、血縁、地縁、知縁、社縁などがあげられよう。現代では非選択縁から選択縁へと比重が移行する傾向が顕著である。ここに宗教がどのように関わるのか。あるいは非選択縁をどのように再構築するのかを機能面から問う。

2. 宗教と非宗教のはざま

宗教が現代社会の中で大きく役割を変え、擬似宗教あるいは霊性運動などが人々のネットワークを

作り変える機能を果たしつつある。それを宗教という西欧的な概念枠組に限定せずに把握しつつ、現代社会に新たな意味世界を構築する媒体となって社会的な絆を創り上げる動態を問うことも考慮する。音楽や映像などの果たす越境性の高まりと宗教の結びつきや、宗教への感受性の世代間ギャップの拡大も重要かもしれない。

3. 男性と女性の関係と社会

男性と女性が異なる宗教世界に関わり、相互関係を保つ事例がある。伝統中国や朝鮮など父系出自が卓越する社会では、男性は儒教、女性は巫俗とする二重構造論が提唱されてきた。果たしてこの議論は現代で受け入れられるのか。また、双系社会ではどうなるのか、母・妻・娘などの地位・役割や、その象徴性・社会性を問う方向性もある。また、男性の出家者が重んじられる社会での女性宗教者の位置(尼僧など)も問題となろう。男縁と女縁の違いや、そのグローバル化の様相に焦点をあてる。

4. 民族誌や事実の面白さ

自己のフィールドでの体験を基盤として、事実の面白さや重みを伝え、そこから構築される独創的な話しを期待したい。事実と理論を橋渡しする過程を問う。但し、題材としては女性を直接的に取り上げたり、女神のみを焦点にすることを条件とはしない。過剰な期待は禁物だが、生活の中の日常性との関わりの度合いから、女性の視点による物の見方の多元性を提示出来るかもしれない。

5. 男性と女性の見方の差異

フェミニズムやジェンダーについての議論を直接には意図しない。民族誌の多くが男性研究者の視点が書かれる事が多く、その偏見を乗り越える試みを女性発表者に期待したい。男性には見えない、よくわからない、女性のみが見える絆(逆も言える)があるかもしれない。男女の縁の作り方が異なるのかどうか。特に、イスラームにはパルダー(男女隔離)があり、現代社会でどのように変容していくのかが問われる。発表者を女性6人、コメンテーターや司会を男性6人から構成して討論して、新しい見方を探る。

2. 「日本社会とキリスト教」

司会:孝本貢、秀村研二

コメンテーター:マーク・マリンズ、磯岡哲也。

本ワークショップは、99 年 6 月から2年間にわたって取り組まれた同名のプロジェクトを閉じるにあたり、その成果報告と最終的総括を目的として開催するものである。

プロジェクト「日本社会とキリスト教」は、教義レベル・思想レベル・個別教会史レベルの研究に偏りがちであった従来の「近代日本キリスト教研究」に対して、本学会の特性を生かした新たな研究領域の発掘や、視座の確立をめざして企画された。そこでは、神学、歴史学、宗教学、社会学、民俗学、心理学、

といった各自の学問的枠組みを生かしつつも、むしろそうした既成の学の視角や問題設定では捉えきれなかった対象やテーマに光を当てることが目標とされた。そして、近代日本の歴史的・社会的・文化的文脈に即して、キリスト教の教義・理念・儀礼等が、個々の聖職者や信徒／未信徒にどのように受けとめられ、理解され、実践されたか(されているか)という具体相を、丹念に検討した実証研究を蓄積していくことを、当面の課題とした。

今回のワークショップでは、これまで研究会に参加できなかった会員の方々にも成果を報告し、幅広く批判や助言をしていただき、次の新たな研究の進展に役立てたい。

午前の部

○問題提起　池上良正

○発題1　川又俊則「『日本社会とキリスト教』の研究史」

本発表では、本プロジェクトの目的の一つだった先行研究の整理を試み、文献目録を提出する。森岡清美がそれを行ってから30数年経つが、研究者の層の薄さや関心の偏りなどもあり、進展した分野もあるが、多くの課題が残されていることは、すでに何回かの研究会で議論されている。それをもう一度、発表者の観点で整理し直す。いわゆる社会学的な立場からの研究や思想史などの研究における「問題意識・研究対象・得られた成果」を個別にまとめ、さらにそれらを分類して提示する。

○発題2　一色哲「地域と教会――近代日本キリスト教研究の批判的検討」

本発表は、キリスト教史の視点から従来の近代日本キリスト教研究の批判的検討を行う。具体的には、明治初年のリヴァイヴァルという平信徒を中心にわき起こった運動等を題材にして、キリスト教の土着化、キリスト教を受容した階層、分析枠組みとしての教派・教団等について再検討を行う。そして、教会の建つ地域が直面する「難儀」を克服し、同時代に生きる地域住民とともに自らの生活の場で生じた問題の解決を試みた平信徒たちの営為を通して、同研究に問題提起を行う。

○フロアを交えての討論

午後の部

○発題3　佐藤壮広「キリスト教専門紙にみる日本社会とキリスト教」

日本におけるキリスト教信仰者の人口は約 1%である。しかしその諸派の活動は、人権、差別、開発援助、宗教間対話、反戦と平和、靖国参拝、日の丸・君が代、カルトの諸問題等々、社会のさまざまな動きに敏感な対応を行うという特徴をもつ。発表では、新聞記事データベースを利用してキリスト教専門紙の記事内容を参照しつつ、その社会的取り組みの諸相を紹介し、日本社会におけるキリスト教の今日的な位置づけを探ってみたい。

○発題4　尾本久美「日本のペンテコステ派教会について―東京都K教会のばあい」

ペンテコステ派またはカリスマ派とよばれる、聖霊体験を重視するキリスト教のグループは、近年、世界の各地でめざましい展開をみせている。本発表では、日本における聖霊運動の受容と展開、またはその実態について、あるペンテコステ派教会を事例として、とくに信者レベルでの入信過程・活動に注目しつつ、考察してみたい。まず、歴史・組織・活動について紹介し、次いで信者へのインタビューや質問紙による調査から得られたデータを手がかりにして、現代日本のペンテコステ派の担い手たちについて、その特徴を明らかにしていきたい。

○発題5　待井扶美子「日本人クリスチャンの墓地継承問題」

死後、キリスト教的に葬られたいと希望するクリスチャンは多い。そのため、多くのキリスト教会が専用墓地(納骨堂も含む)の確保に努めている。しかし、家族員の一部のみがクリスチャンであることの多い日本の現状下では、たとえ教会墓地を造成できたとしても、未信者の家族との関係で円滑な墓地運営が困難となる場合が生じてくる。本発表では、墓地造成から30年以上経つ、八戸キリスト教霊園と盛岡キリスト教合同墓苑の利用状況の変遷に着目しながら、教会墓地が信徒にもたらすメリットとデメリットについて、具体的事例を提示しつつ報告する。その際、特に未信者の家族との間に生じる葛藤や軋轢に対し、信徒や教会はいかなる対応策を見出してきたのかという点に注目したい。

○発題6　小川順敬「福音派の中の「沖縄」――沖縄の伝道集会を通して見た」

日本の福音諸派が沖縄のキリスト教に向ける関心は高い。沖縄で頻繁に開催される伝道集会は、沖縄の教団・超教派伝道団体の主催だけでなく、全国規模であることも多い。そういった集会の際に、本土のキリスト教教職者が積極的に沖縄に出向き、伝道活動の場を広げようとする。本発表では、沖縄という「場所」をめぐる福音諸派の伝道活動の一端を紹介し、福音諸派の沖縄に対する位置付けを考えることにしたい。

○フロアを交えての討論

3.「新・宗教研究の課題と展望」

趣旨:

本ワークショップは、特に「宗教概念」「方法論」そして「カルト問題」に焦点をあて、現代の宗教研究がどうあるべきなのかを、多角的に論じようとするものである。

現代、宗教概念は揺らぎ、霊性という言葉も多用されるようになってきている。一方で、いわゆる「カルト問題」も広く社会に認識されつつある。新霊性運動とカルトの両極に代表されるこうした動きに対し、宗教研究のアプローチは、どのように刷新されていくべきなのだろうか。

いま、世界の宗教社会学研究においても、合理的選択理論の是非や“宗教研究のパラダイム・シフト”が論じられている。また、カルト・反カルト問題や、ある種のファンダメンタリズムにみられるように、社

会的葛藤が宗教現象を「構築」するような文脈が目に留まり、広く論じられるようになってきた。それらを我々はどう受けとめて、現代宗教の分析に適用していくべきなのだろうか。

これからは、単なる教団研究をこえ、当事者の意識や語りに即して、共同性や信仰生活を記述・分析することも必要であろう。その際には、どのような問題点があるのだろうか。

そして、オウム以降、日本においても問題化しつつあるカルトや、そのもうひとつの当事者としての反カルト運動に対して、我々研究者はどのような研究上の困難を抱えているのだろうか。また、その打開策はあるのだろうか。

現代宗教の研究は、これまでなされてきた「新宗教研究」の単なる延長線上にあるのではなく、方法論の上でも対象把握の上でも、それを克服しなければならない面が多い。たとえばサブカルチャーの隆盛やアイデンティティ・ポリティクスの広がりをも視野に入れつつ、「現代」および現代における「宗教性あるいは霊性」を捉える方法が必要なのだ。

ワークショップ当日午前の報告では、宗教概念の規定、現代宗教の状況的特異性、またいくつかの理論枠を検討し、議論の土台を提供する。午後は、より個別、具体的な事例研究によって、豊かに現代宗教の様態を描き出しつつ、研究におけるアプローチの問題を中心に議論する予定である。いわゆる先進諸国における「(近)現代」の「新・宗教研究」のワークショップとして、学会に広く問題提起したい。

報告者:

午前の部　司会:小池　靖(日本学術振興会)

10:00-10:10	趣旨説明
10:10-10:35	前川理子(東京大学)「宗教」/「宗教」でないもの－明治の「倫理的宗教」論争－
10:35-11:00	伊藤雅之(愛知学院大学)宗教・宗教性・霊性研究の地平－なぜいま「当事者性」なのか？－
11:00-11:25	岩井　洋(関西国際大学)宗教経済学と宗教研究の可能性
11:25-12:00	討論　ディスカッサント:葛西賢太(上越教育大学)

午後の部　司会:大谷栄一(国際宗教研究所)

13:30-13:55	樫尾直樹(慶應義塾大学)民俗/民族宗教論の課題－フランス・MAHIKARIに見るジャーゴンと感情の分有－
13:55-14:20	菊池裕生(上智大学)物語と自己－インタビューという相互行為場面に着目して－
14:20-14:45	弓山達也(大正大学)カルトをめぐる「当事者性」－地域住民とそれを調査する「私」にスポットをあてて－
14:45-15:00	休憩
15:00-15:25	櫻井義秀(北海道大学)「カルト」調査研究の課題
15:25-16:30	総合討論　司会:芳賀学(上智大学)　ディスカッサント:深澤英隆(一橋大学)

死をめぐる実践宗教
◆南タイのムスリム・仏教徒関係へのパースペクティヴ
西井涼子　異なる宗教が共存する場を描く　四八〇〇円

芸能伝承の民俗誌的研究
◆カタとココロを伝えるくふう　上野　誠　民俗文化としての祭り・芸能伝承の特色等を究明する　四五〇〇円

祭りと宗教の現代社会学
芦田徹郎　祭りの盛衰と葛藤、宗教の変容と逆説をとおして、現代人の心の在処と行方をさぐる　一三〇〇円

グローバル化とアイデンティティ
宮永國子　グローバル化のなかで、アイデンティティの選択肢として宗教があらわれる様相を描く　一三〇〇円

「神」という謎　宗教哲学入門
上枝美典　ユーモアを交えつつ分析的宗教哲学の定石を平易に解説する宗教と哲学のための十章　一〇〇〇円

民俗宗教を学ぶ人のために
山折哲雄・川村邦光編　一九〇〇円

宗教の根源　祈りの人間論序説
棚次正和　一五〇〇円

宗教とナショナリズム
中野　毅・飯田剛史・山中　弘編　一三〇〇円

世界思想社　京都市左京区岩倉南桑原町56　☎075(721)6506
http://www.sekaishisosha.co.jp　〈消費税別〉

アジア移民のエスニシティと宗教
吉原他編　急激な民族移動がもたらす多様な移民社会の誕生。ホスト社会との激しい文化接触を二つの主題を通して分析。五〇〇〇円

ベトナムの祖先祭祀　潮曲の社会生活
末成道男著　日常生活や儀礼に組み込まれた祖先祭祀の基層構造を考察。付録マルチメディアCD-ROM。　揃い一五〇〇〇円

台湾の道教と民間信仰
劉枝萬著　民間信仰の実態を巫俗の系譜から検討し、道教の祭祀・儀礼との関連を分析。漢民族固有の民俗宗教に迫る。八〇〇〇円

神話・宗教・巫俗　日韓比較文化の試み
崔吉城・日向一雅編　日韓の文学と民俗研究者が、東アジアの視点で、神話・王権・旅芸人・源氏物語等の主題に挑む。　五〇〇〇円

チベット研究文献目録　中文・日文　1945—1999
索文清編　中国・日本の著作・翻訳・文献・資料の目録。蒙古・メンバ等周辺諸族の研究、台湾・香港の文献も収録。　四〇〇〇円

台湾民間信仰研究文献目録
林美容・三尾裕子編　植民地時代から今日までの日本語による文献を網羅。解説・著者別・年代順・文献表題語彙索引。　三五〇〇円

中国の霊籤・薬籤集成
酒井忠夫他編　民衆の吉凶観を示したおみくじの原型。北京・台湾・香港等で収集した清末以降の四十余種三千余枚。　八五〇〇円

（定価は税別）
〒114-0014　東京都北区田端4-14-9　風響社　TEL: 03-3828-9249 URL http://www.fukyo.co.jp

現代宗教 2001

（創刊号）

―特集・二一世紀の宗教―

❖国際宗教研究所編集❖A5判二六八頁❖本体二二〇〇円

■現代社会における宗教の役割を確かな情報の下にとらえ直し、国内外の、宗教がかかえる問題や可能性を提起する。年一回発行。

■創刊号は、対談「ポストモダン社会と仏教」「現代宗教と女性」をはじめ、佐々木宏幹「仏教教団と葬祭儀礼」、島薗進「地域に根ざした宗教は可能か？」、石井研士「統計に現われた日本人の宗教性の現状」、臼杵陽「ユダヤ教と原理主義の未来」など十論文を掲載。

精神世界のゆくえ ―現代世界と新霊性運動―

島薗進著　四六判四一〇頁❖本体二八〇〇円

一九八〇～九〇年代にかけて宗教や近代合理主義を超えた第三の道をめざす精神文化の潮流が世界的な規模で台頭してきた。「新霊性運動」として著者がとらえるこの運動の全体像と可能性・問題点を探る。

墓と葬送の現在 ―祖先祭祀から葬送の自由へ―

森謙二著　四六判三二八頁❖本体二八〇〇円

家族によって担われてきた死者の祭祀や墓地が「家」の変容や少子化により継承されなくなっている。墓地問題の核心を衝く。

日本民俗宗教辞典

佐々木宏幹　宮田登　山折哲雄　監修

B5判　六七六頁　本体一九〇〇〇円

東京堂出版

〒一〇一―〇〇五四
東京都千代田区神田錦町三ノ七
TEL 〇三（三二三三）三七四一
FAX 〇三（三二三三）三七四六

日本の神仏の辞典

▼6月中旬刊行！

大島建彦
薗田稔
圭室文雄
山本節
［編］

―日本人は何を信仰してきたのか

神道、仏教、民俗信仰、修験道、道教・陰陽道、キリシタン・キリスト教、新宗教、アイヌ民族の信仰、奄美沖縄の信仰――。諸宗教のジャンルを超えて、神と仏・神社・寺院・霊山から、宗派・教団や民間のはやり神・妖怪に至るまで、あらゆる信仰の対象を見出しに立て、的確・簡明に解説。何よりも日本人の生活に即した、さまざまな信仰の実態に迫る。全2万項目。

B5判・上製・1400頁
本体予価 22,000円

大修館書店　ご注文はこちらへ▶tel. 03-5999-5434

日本宗教史研究文献目録2

大浜・圭室・宮田・根本編　2000.10刊／A5判　800頁　13800円

1987～97年に発表された日本宗教史に関する文献約1万3000タイトルを，時代別・執筆者別に収録．

日本宗教史研究文献目録1

増刷出来　大浜・圭室・宮田・根本編　1996.12刊／A5判　520頁　11000円

1971～87年に発表された日本宗教史に関する文献約1万タイトルを，時代別・執筆者別に収録．

祈願祭祀習俗の文化史

奥野義雄著／8400円　2000.10刊／A5判・408頁

文献史料や考古学の発掘成果を援用しながら，神・仏への祈りや祀りの習俗文化を明らかにする．

まじない習俗の文化史

増刷出来　奥野義雄著　97.07刊／A5判・334頁／6900円

古代・中世に息づいていた〈まじない習俗〉の実態を，考古資料や日記・記録から明かにし，併せて現行習俗にみられるまじないの諸相を探ぐる．

羽黒修験　その歴史と峰入

宮家　準著　2000.10刊／A5判・286頁／5900円

史実に即した羽黒修験の通史を，地方組織の展開も考慮に入れて論述し，秋の峰と松例祭の調査分析を試みる．併せて外国人による修験研究を紹介．

薬師信仰　護国の仏から温泉の仏へ

西尾正仁著　2000.10刊／A5判・390頁／7400円

御影史学研究会民俗学叢書13　除病安楽の仏とされる薬師．その信仰を各時代ごとに取りあげ，民間説話とそれを持ち伝えた人々に焦点をあてる．

一遍の宗教とその変容

金井清光著／9900円　2000.12刊／A5判・432頁

賦算札がなぜ全ての人々を救えるのか，また中世最大の浄土教団がなぜ近世に大きく変容するのか．

法然浄土教成立史の研究

吉田　清著　2001.04刊　A5判・206頁　2800円

成立期の法然の専修念仏教団が遭遇した「念仏停止」を通し，その背景に念仏ヒジリの姿を捉える．

神なる王/巫女/神話

高橋統一著　2000.05刊／A5判・152頁／2400円

〈人類学から日本文化を考える〉　神なる王（フレーザーと折口信夫）／巫女の文化／通過儀礼と年齢階梯制／神話と神社をつなぐもの（石見と紀伊）

ミッション・スクールとは何か

北川直利著／3800円　2000.03刊／A5判・276頁

〈教会と学校の間〉　アンケート調査などをもとに，伝道と教育の問題を，宗教社会学の視点で捉える．

巡礼論集1　巡礼研究の可能性

巡礼研究会編　2000.04刊／A5判・202頁／3800円

仏の旅・人の旅／熊野本願聖の巡歴／百三十六部妙典の回国納経／巡礼と順礼／巡礼歌の性質／平成の西国巡礼／古代アンデス巡礼／ドイツの巡礼

生死の民俗

井之口章次著　2000.09刊／A5判・290頁／5900円

名著「仏教以前」以来，一貫して日本の葬式や霊魂信仰を研究してきた著者の業績を，「葬儀の民俗学」「生死の信仰・俗信」の2部に分けて収録．

岩田書院　〒157-0062 東京都世田谷区南烏山4-25-6-103【価格は税別】
TEL:03-3326-3757 FAX:03-3326-6788 http://www.iwata-shoin.co.jp

日本史事典

藤野　保 編集代表　岩崎卓也・阿部　猛・峰岸純夫・鳥海　靖 編集

A5判　872頁　本体23000円（53011-0）

精選した用語と世界史を視野に入れた最新の解説で日本歴史を俯瞰。時代概説と用語解説で，歴史の展開過程がわかるように構成。時代情況に適切な写真・図・表で史料集としても最適

＜井上ひさしの読書眼鏡＞

『日本史事典』（朝倉書店刊）は歴史の展開過程を小さく区切って，まず，簡略に説明してから，その理解に必要なことがらを事典式にくわしく書いています。たとえて云えば，教科書と歴史事典を上手にミキサーにかけたようなつくり。〈……また，GHQの手で旧戦争指導者が戦争犯罪人として逮捕され，最高責任者がA級戦犯として連合国側の極東国際軍事裁判により処刑された。〉このように東京裁判を大雑把に掴み上げておいてから，しばらくあとに，九百字を費やして，この裁判の功罪を詳しく説いています。知識をもっているだけでは，単なる物知り。これらの知識をうまく組み合わせて，なにかもっとましな知恵を産み出したい。そこで，この種の事典が必要になる。まず，概説的説明で，アタマの中の知識をきちんと区分けして文脈をつくり，つぎに事典的説明で，区分けした知識の一つ一つを丁寧に磨き上げようというわけです。

（読売新聞2001年2月25日「本よみうり堂」より抜粋）

歴博万華鏡

国立歴史民俗博物館 監修　B4判　212頁　オールカラー版　本体28500円（53012-9）

●国立で唯一，歴史と民俗を対象とする国立歴史民俗博物館（通称・歴博）の主要な収蔵品を掲載
●大判のオールカラーの写真と斬新なレイアウトにより，見るだけでも楽しい画面を作成
●簡明平易で魅力ある解説文により，歴史と民俗の新しい世界への誘い
●巻末には使用した資料の詳細なデータを付記

朝倉書店　〒162-8707 東京都新宿区新小川町6-29
電話　営業部 (03) 3260-7631　FAX (03) 3260-0180
http://www.asakura.co.jp　＊ホームページで「書籍注文」ができます

＊本体価格は消費税別です
(ISBN)は 4-254- を省略

中国東北部朝鮮族の民俗文化

文部省出版助成金刊行

中国東北部朝鮮族民俗文化調査団（代表：竹田旦）編　A5判／四四〇頁／定価一八、〇〇〇円

中国東北三省に居住する一九〇万人朝鮮族の民俗文化を日・中・韓三国の国際調査団が幅広く調査、報告する。

日韓祖先祭祀の比較研究

竹田　旦著　四六判／三三〇頁／定価四、〇〇〇円

沖縄の祖先祭祀から発して韓国・中国朝鮮族の調査を進め、それぞれの異同を追究して日韓両国における社会・文化の特質を比較する。

シャーマニズムとその周辺

櫻井徳太郎編著　A5判／三五八頁／定価九、〇〇〇円

本書の内容

一　現代シャーマニズムの行方―その情勢と動向（櫻井徳太郎）　二　霊媒と予言者のあいだ（佐藤憲昭）　三　シャーマン（巫者）と成巫過程（谷口貢）　四　「女巫」と御巫・宮人（義江明子）　五　善光寺における神仏交渉について（小林敏男）　六　祖師信仰の一側面（長谷部八朗）　七　北海道の民俗宗教に関する一考察（森雅人）　八　木曽御嶽講の御座（牧野眞一）　九　盲僧とシャーマン（高見寛孝）　一〇　富士山噴火による甲斐国八代郡浅間神社の創建（菅原征子）　一一　歌舞音曲と霊魂観念（加藤正春）　一二　キリスト教回心談のなかのカミダーリィ（小川順敬）　一三　韓国における亡霊結婚の性格に関する考察（安田ひろみ）　一四　韓国一仏教寺院の素描（大野祐二）　一五　日本人の他者としての童乱（杉井純一）　一六　現代ギリシアにおける民俗宗教研究の特徴（内山明子）　一七　ネオ・シャーマニズム論の問題点（佐々木宏幹）

沖縄の家・門中・村落

北原淳・安和守茂共著　A5判／三三六頁／定価一二、〇〇〇円

門中（もんちゅう）と村落の双方の単位をなす家（やー）の軟硬併存の構造に迫り、やーを基礎とする門中が、アジア諸国の類似組織と異なり、沖縄人独自の社会学的構成物であるという新解釈を試みる。

韓国と沖縄の社会と文化

沖縄・韓国比較社会文化研究会編　四六判／二九六頁／定価三、八〇〇円

沖縄、韓国全羅南道および済州島の三地点をフィールドとし、社会組織、祖先祭祀、民間信仰　綱引き儀礼、民話を調査し、共通点、相違点を抽出するとともに、アジア地域における分布、個別形態およびその変容を明らかにすることを試みる。

日本の中の百済文化―師走祭りと鬼室神社を中心に―

任東權著／竹田旦訳　四六判／二九六頁／定価三、五〇〇円

日向に逃れた百済王族の一家が年に一度出会う「師走祭り」。近江にも百済から渡来した王族を祀る鬼室神社がある。丹念な実地調査に基づき異色の比較文化論。

壮族文化史研究―明治以降を中心として―

塚田誠之著　四六判／三二六頁／定価四、〇〇〇円

中国少数民族のなかでも最大の人口をもつ壮（チワン）族、その文化をふくむ歴史については従来断片的にしか知られていなかった。歴史民族学の方法を駆使して壮族の文化史の全貌の解明に迫る。

朝鮮の国名に因める名詞考

朝鮮総督府中枢院調査課編　復刻版　三〇〇部限定　A5判／二四四頁／定価八、〇〇〇円

古代より徳川時代までの間において、カラ、ミマナ、クダラ、シラキ、コウライ、チョセン等、半島の国名ある名詞、計四百十有七許を詮素蒐集して考證したもので、神社、佛、寺、地名、姓氏、動物、植物、舞楽、器物類などに及んで収拾。

仮面と巫俗の研究―日本と韓国―

鈴木正崇・野村伸一編　A5判／四七九頁／定価八、五〇〇円

【主な内容】　はじめの仮面戯　野村伸一／巫堂のクッの演劇的要素　黄耀詩／韓国仮面戯と儺礼の関連様相　田耕旭／二十世紀の仮面劇と人形劇の芸能伝承過程の研究　徐淵昊／生きている人のためのクッ　劉永大／済州島のクッの芸能性　野村伸一／変身の論理　神田より子／神楽の構成と世界観　鈴木正崇／日本の神楽と韓国のクッ　鈴木正崇

各価格は税別本体価格

第一書房
〒113-0033 東京都文京区本郷6-2-10　TEL.03(3815)1072　FAX.03(3816)1854
東大正門前　振替00140－9－39120　http://www.kt.rim.or.jp/~dai-1/e-mail:dai-1@kt.rim.or.jp

小学館の人文図書・好評発売中

神樹
東アジアの柱立て
萩原 秀三郎

東アジアには、柱を立てて新しい年＝太陽を迎える祭りが多い。祭りを通してアジアの人々の生命観を探り、諏訪の御柱や縄文の巨柱とのつながりを考える。

定価：本体2,800円＋税
●A5判／208頁

往生考
日本人の生・老・死
宮田 登・新谷尚紀【編】

日本人は「老い」をどのように受け入れてきたのか。日本人の死生観から「老いの価値」を再発見し、これからの長寿社会を豊かに生きる知恵を探る。

定価：本体2,800円＋税
●A5判／352頁

小学館　〒101-8001　東京都千代田区一ツ橋2-3-1

スリランカの宗教と社会
文化人類学的考察
●鈴木正崇　村落や地域社会、変動下の都市にも現地調査を実施、民族対立や経済にも目配りしつつ社会構造と宗教儀礼を総合的に考察。　３３９８１円

日本王権論〈新装版〉
●網野善彦／上野千鶴子／宮田 登
天皇制は何に支えられ、どのような機能を果たしてきたか。その特異性、存続の理由は何か。様々な視角から日本精神史の深層に迫る討論。　１８００円

修験道と日本宗教
●宮家 準
山岳で修行し、神人合一と験力の獲得をめざす修験道。日本の宗教文化の基層を作り上げてきた壮大な運動と仏教、神道、陰陽道などの関係を考察。３０００円

宮家 準〈三部作〉
- 修験道組織の研究　３８０００円
- 修験道儀礼の研究〈増補決定版〉　２００００円
- 修験道思想の研究〈増補決定版〉　２３０００円

ラーマーヤナの宇宙
伝承と民族造形
●金子量重／坂田貞二／鈴木正崇編　２８００円

春秋社　東京都千代田区外神田2-18-6
☎03-3255-9611〈価格は税別〉
http://www.shunjusha.co.jp/

神と仏の民俗（日本歴史民俗叢書）
鈴木正崇著
神と仏の複雑な関係は、知識層と一般民衆双方の心の奥深くに浸透し、極めて錯綜した交渉過程を経てきた。神楽と仏教儀礼を考察し、地域性豊かに、個性的な想像力によって創り変えてきた、民衆の精神の歴史を解明する。A5判・三六四頁／六八〇〇円

中世の仏教と社会
大隅和雄編
中世の仏教に焦点をあて、さまざまな視点からその実相を解明する。九条家の祈禱僧智詮をはじめ、明恵・日蓮・虎関師錬の自国意識、茶・禅病などを取り上げ論究。仏教史を超え、新たな宗教史の構築を目指した意欲的な論集。A5判・二二二頁／六五〇〇円

中世奥羽の民衆と宗教
誉田慶信著
現代人の想像を超えた重厚な宗教的世界に満ち溢れていた中世社会。本書は、国家史の枠組ではとらえきれない宗教と社会との多様な関わりを、北方史における地域社会に発見し、民衆の視座から多面的に考察する。A5判・三三八頁／七〇〇〇円

中世寺院の社会と芸能
土谷 恵著
醍醐寺・童・芸能をキーワードに、中世寺院社会の多様性と実態を解き明かす。醍醐寺の組織構造の特質を検討し、童の存在形態からその役割と本質を分析。童が担った舞楽（童舞）に、中世寺院の芸能のあり方を探る。A5判・三七八頁／一〇〇〇〇円

民間に生きる宗教者（シリーズ 近世の身分的周縁①）
高埜利彦編
だれもが菩提寺をもった江戸時代。幕府の宗教政策のもと集団化・組織化せざるを得ない宗教者たち。組織の周縁にあった宗教者たちはどのように生きたのだろうか。仏教中心に語られてきたその実態を周縁の人々から探る。四六判・二八六頁／二八〇〇円

最新の〈日本史年表〉決定版――『国史大辞典』別巻
日本史総合年表
全1冊
加藤友康・瀬野精一郎・鳥海 靖・丸山雍成編
四六倍判／一二〇〇〇円
旧石器時代から一九九九年まで、政治・経済・社会・文化にわたる三万六五〇〇項目を収録。巻末に豊富な「日本史備要」と詳細な「索引」を付す。一一一六頁〈明細内容見本送呈〉

二〇〇一年版 出版図書目録送呈
東京都文京区本郷七丁目二―八
電話〇三―三八一三―九一五一
吉川弘文館（価格は税別）

歌・踊り・祈りのアジア
星野紘・野村伸一編　日本・韓国・中国・インドネシア・ロシア（シベリア）の民俗芸能の諸相を紹介。　7000円

現代日本の宗教事情　諏訪春雄編　2500円
現代日本を動かす宗教の実態に多方面からアプローチする。

東アジアの身体技法　石田秀美編　3200円
東方における身体について、憑依や身体錬金術などの身体技法をとおして考える。

庶民宗教民俗学叢書　全7冊・揃価75000円
志村有弘編　【リプリント版】　宗教民俗学の研究に取り組んだ先人たちの業績を再び世に出し、改めて日本人の精神史を照射する。

性の民俗叢書　全5冊・揃価60000円
川村邦光編　【リプリント版】　二十世紀初頭に誕生した〝性の民俗〟研究の原点を掘り起こす。

能楽と中国の古芸能・信仰　13300円
葉漢鰲著

近代中国のシャーマニズムと道教　13800円
志賀市子著

冥報記の研究　説話研究会編
第一巻　カラー本文・釈文付き　27400円
第二巻　索引・解説・研究　18800円

アジア遊学　毎月5日発行　1800円

勉誠出版　〒102-0083　東京都千代田区麹町4-8-36　http://www.bensey.co.jp
TEL 03-5215-9021　FAX 03-5215-9025　【税別価】

講座　人間と環境

第9巻　**死後の環境**
新谷尚紀責任編集　2300円
「死」の文化が映す「生」のアイデンティティ

第10巻　**大地と神々の共生**
鈴木正崇責任編集　2300円
魂が呼応する「境界」からのメッセージ

第11巻　**自然の音・文化の音**
山田陽一責任編集　2500円
音楽――からだと環境が出会う場

癒しのうた
―マレーシア熱帯雨林にひびく音と身体
M.ローズマン著／山田陽一・井本美穂訳
マレーシアに住むテミアー達の、身体と心を癒す、うたと儀礼のパフォーマンス。　3200円

生と死の倫理―伝統的倫理の崩壊
P.シンガー著／樫　則章訳　2300円
体外受精，人体臓器移植など、現代科学と現代倫理の問題を鋭く問う。

欲望・身体・生命―人間とは何か
藤田正勝・松丸壽雄編　3500円
理性の枠におさまらない、欲望の主体、身体的存在、生命としての人間を考える。

新しい教養のすすめ　**宗教学**
細谷昌志・藤田正勝編　1900円
宗教の多様性を多角的に読み解くとともに、「読む事典」としても使える教養の書。

日本の哲学①　特集：西田哲学研究の現在
日本哲学史フォーラム編　1800円
現在の哲学研究の地平から西田の思想を問いなおす。

京都市左京区吉田神楽岡町8-158　〒606-8311　郵便振替01060-5-9347
昭和堂　TEL 075-761-2900　FAX 075-761-2960
＊表示価格はすべて税抜きです